



『僕たちは希望という名の列車に乗った』は、ドイツ人のデトリッヒ・ガルスカによるノンフィクション『沈黙する教室』が映画化されたものです。本は5月ごろに読みましたが、この映画が港南台シネサロンに来るのを待っていたのです。この本、映画は東西冷戦下の東ドイツで起きた高校生の事件を扱っています。これを読み、映画を見て、すべてが生々しく、私の胸に迫ってきました。映画化されたものは事実を印象付けるために脚色されていましたが、著者は「すべて事実と同じです」と言ったそうです。原著の広告文には「勇気、結束、冷戦の実話」とありました。監視社会で、密告を恐れ、息詰まるような思いで生活している姿が描かれています。

主題は、授業中の高校生の5分間の「沈黙」ですが、それが重大な結果を招いたことが描かれています。彼らの「沈黙」は 1956 年11月、ハンガリーで政治的自由を求めた労働者、学生のデモに、ソ連が軍事介入し、多数の犠牲者が出たことへの、若者らしい悲しみの共感を表した「黙祷」ですが、何しろ授業中のことでした。担当の教師は生徒たちに理由を聞いても答えがなく、反抗的な態度だと怒って、職員室に帰り、思わず愚痴ります。誰が首謀者で、何のために行ったかがピリピリするほど問題視されました。東ドイツも共産主義の一党独裁で、政治的に批判することが許されず、監視があり、自由は制限され、体制に忠実であれば、恩恵に与れる、そのような社会でした。勝手に「黙祷」した行為は、体制への批判的デモンストレーションとみなされ、処罰すべき事態となりました。教育省の大臣まで学校に来て怒り、検査官が徹底的に、執拗に、様々な手段を用いて調べ始めました。

17, 8 歳の生徒たちは大学進学コースに選ばれた努力家、ほとんどが農家か労働者階級出身の若者で、受験は夢実現のための切符です。新しいもの、未知のもの、恋など、ロマンを求める元気な若者たちです。黙祷は生徒たちの一種の「若気の至り」、「若者のノリ」もあったでしょうが、情報も制限され、抑圧されている日々の鬱憤がはじけたとも思えます。ハンガリーの民主化闘争に関心を示すのは反革命的であるとして、大学受験の資格はく奪、退学だと脅迫され、それぞれの身の事情も把握され、追及されていきます。その過程で東ドイツの苦悩も現れます。戦前はナチ党の全体主義体制のもと、生き、ソ連と戦いました。敗戦と共に、ソ連に支配され、生活が逆転した苦悩があります。生徒たちは親のナチスでの経歴、身分からも様々な微妙な立場に立たされてもいます。

生徒たちは「黙祷」を誰が言い出したか知っていて、皆が同意したわけではなくても、クラス全員の思いとしてやったことだと主張し、検査官に口を割りませんでした。反革命分子と見なされ、クラス全員が退学処分になりました。故国での将来を絶たれた生徒たちは、西ドイツを目指して、鉄道で国境を越えて行きました。ドイツの高校生の世界への目、友情と勇気に圧倒されました。

1956年という事件の起きた年、私は14歳でした。本当に幼稚で、世界のことは何も知りませんでした。同じ時代をこんなに厳しく生きている高校生がいたと言うことに衝撃を受けました。また、主人公たちと同じ高校3年生のころ、日本では日米安保条約締結に関して反対運動が大きくなっていました。私は何をしていたらと思うせられます。事件の舞台となったシュトルコーという小さな町は、一度訪ねたことがある友人のフェルト牧師の最後の任地のすぐ近くです。また、東ドイツには友人がいて、彼らから東西冷戦下の体験をお聞きしたことがありました。市民的自由は全くなく、監視され、ものが言えない世界だったと言います。今日、「表現の不自由展」再開のニュースを聞きました。日本も、「物言えば唇寒し秋の風」と、唇を封じる気配が濃くなっているのを感じます。